

生 *Seikatsu Bunkashi* 史

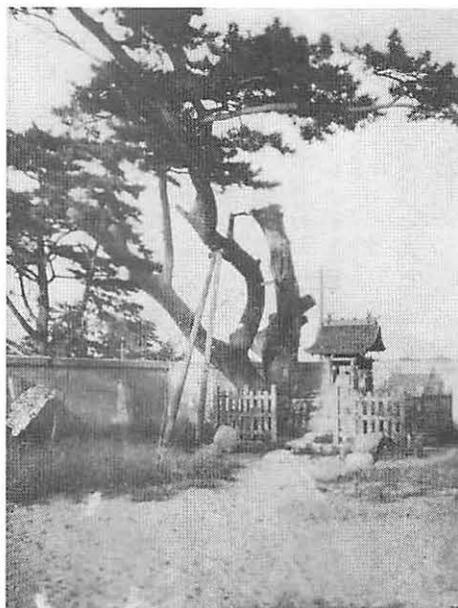
生活文化

<史料館だより>

目 次

- ◇セーラー・カラーはフードの変形 杉浦昭典 2
- ◇本庄村史刊行と太田垣さんを偲んで 大国正美 4
- ◇トライやる・ウィークと史料館
—— 本庄中学校の生徒を受け入れて —— 水口千里 6
- ◇展示品との対話（一七）
大小暦の札… 水口千里 7
- ◇史料館日誌抄 道谷 卓 8

2008. 3. 31
NO.36



神戸高等商船学校（現神戸大学海事科学部）
構内東北隅にあった踊り松と金比羅宮分祠（現
国道43号線北側、養正館と道路を隔てた公務員
宿舎の駐車場がある場所）昭和初期の写真
松井美子さん提供

神戸深江生活文化史料館

セーラー・カラーはフードの変形

史料館館長 杉浦昭典

「セーラー服は水兵服ではない」と前号に述べた通り、セーラー服が水兵服を模倣したというのは巷説に過ぎない。ファッション・デザインともいえる、先に作られたセーラー服を真似て水兵服が出来たのである。セーラー服のセーラーは「帆船」または「帆船に乗る人」という意味であって「水兵」というような狭く限られた意味ではない。記録に残る最初のセーラー服は、一八四六年九月、英国のヴィクトリア女王に伴われてロイヤル・ヨット（王室御用船）に乗った当時五歳の王子アルバート・エドワード（後の英国王エドワード七世）が着用した男児用乗船服であった。この場合、女王は日記に王子の服をセーラーズ・ドレスと書いている。

その後、一八五七年に英国海軍は、王子の着たセーラー服のデザインを参考にして作った水兵服を正規の軍服として採用したが、少し遅れて他の諸国海軍も相次いでこれに倣い、やがて世界中で類似の水兵服が水兵の軍服として定着した。従って「セーラー服は水兵服ではないが、水兵服はセーラー服である」ということはできるのである。ただし、一八五三年から五五年にかけてのクリミア戦争当時、「ロンドン・ニューズ」に掲載された木版画を見ると一八五七年制定の水兵服に酷似する服装の水兵群像が描かれており、既に制定数年前から英国海軍が水兵服の正式採用に向けての試行段階にあったということがうかがえる。

英国海軍の水兵は、一八五七年一月に制定された規則に基づいて、紺色サージのフロック、(後になって)着替え用ジャンパー(ただし、ジャンパーは裾をズボンの上に重ね、フロックは裾をズボンにたくしこむ)、白テープで縁取りしたカラー(襟)、紺色ジャケット、紺色ズボン、白いズツクの訓練用ジャンパーおよびズボン、ピー・

ジャケット(ハーフ・コート)、絹の黒色ハンカチーフ(スカーフまたはネッカチーフ)、気候に合わせて白または黒色の(軍艦名を記すりボンを巻いた)麦稈帽子(カンカン帽)、(軍艦名を記すりボンを巻いた)紺色キャップ(縁なしの水兵帽)並びに(下士官のみ)階級章というこれら一式を支給されることとなった。フロックがセーラー服をモデルにした正規の水兵服であり、ジャンパーは同型の通常服である。ジャケットとは金ボタン付き両前開きで腰丈ほどの短い上衣のことをいい、一八世紀末から水兵服ができるまでも水兵たちがよく着ていたので、ブルー・ジャケットは英国水兵の俗称にもなっていた。

英国海軍士官の制服規則は一七四八年に初めて定められたが、下士官・兵の服装についての規定はなく、軍服としての水兵服が現れるまで、軍艦における水兵の服装については、あまり厳しい制約はなかった。一応、艦長がその権限によって、乗組員になるべく見苦しくない服装を保たせなければならぬということにはなっていたが、水兵たちはほとんど思い通りに好き勝手な衣類を身に着けていた。大抵は、前借りできる給料の範囲内で、主計長が管理し定期的な艦内で販売する安価で画一的な既製品の衣類を購入したが、それすら買えないものは、有り合わせの布切れをうまく手に入れるか、薄い帆布を倉庫からくすねたりして、何とか着用できるものを自分の手で縫い上げることによって間に合わせていた。といっても普段は素足にシャツとズボンだけであった。ほとんど全員が汗拭き用のネッカチーフを首に巻き胸元でネクタイ風に結んでいたが、雨中や寒冷時にはフード(頭巾)付きのかぶりジャケットを重ね着した。それでも特に盛装しなければならない場合や上陸する時には、靴を履き、特有のジャケットを着て流行の帽子を被ったものである。

一九世紀の終わり近くまで、主力軍艦は帆走の機能を捨て切れなかったで、水兵はほとんど帆走要員であった。したがって、水兵の服装も自ずから帆船の船上で活動し易いものになっていた。一九世紀米国の海洋作家ハーマン・メルヴィルの作品に、一八四三年から翌年にかけて米国軍艦の一水兵となり、ペルーのカヤオから米

東岸ノーフォークまで航海した自分の体験を基に、帆走軍艦の乗組員生活と航海の様子を事細かに描き出した『ホワイト・ジャケット』という小説がある。主人公の水兵は軍艦に乗って間もなく自分のグレゴを紛失したことに気が付く。グレゴとは「ギリシアや東地中海沿岸の農民・漁民が用いた厚みのある粗末な布で作るフード付の短いコート」であり、布生地材質は別として、その形状は現在のアノラック、パーカ、ヤッケなどという防寒防水衣に似ている。そこで南米大陸最南端を回る厳寒のホーン岬沖航海に備え、自分で帆布を裁断して手製の防寒着を作るが、防水用に塗るタールを分けて貰えなかったので、そのまま着るしかなかった。荒天時には帆布の白さが目立ち、いつしかその水兵は「ホワイト・ジャケット（白い上衣）」の名で呼ばれるようになっていたというわけである。

メルブイルの『ホワイト・ジャケット』を読んでいると何となく当時の帆船乗りの姿が浮かんで来る。激しい風雨の中、マストに登り、ヤードに渡って、風にあおる帆を引き寄せて畳み込む時、頭にかぶったフードも脱げて背中になびくが、セーラー服のデザインはそんな船乗りの姿をイメージして出来上がったものである。セーラー服の特徴は、プルオーバー（かぶり）方式の上着、背中に垂れる大きな四角い襟、Vネックとネクタイ風のネックカチーフにある。中でも一番の特色はセーラー・カラーと呼ばれる大きな角襟にある。角襟については「風の強い船上で命令を聞き取り難い時に耳の後ろに立てるため」という俗説があるが、帆船の上でそんな場面は全く有り得ない。「長い航海で伸び放題の毛髪を束ねて背中へ垂らしたので、服が汚れ易く、それを防ぐため」ともいうが、毛髪に関しては士官も同じ条件下にあったことを思えば、これも全く無意味である。ネックカチーフがそのために使われたという説もあるが、そうではない。ネックカチーフは、艦内で汗拭用の他に鉢巻のような使い方もあったが、また水兵たちにとって唯一のおしゃれ装具であり、上陸時にはその生地と色や柄に凝ったという。

ではセーラー服に何故セーラー・カラーがあるのか、またセーラー

・カラーは何故あんな形をしているのか。セーラー服は帆船船上の労働服をイメージして、そこにファッショニ性を持たせたデザインであるから、その原型は一九世紀初期の帆船における船乗りの服装にある。メルブイルの『ホワイト・ジャケット』に出て来る水兵の服装はその一例であり、メルブイルが捕鯨船の船員から軍艦の水兵になってもその服装が変わらなかったように、当時の帆船の船乗りの服装に軍艦と民間船の違いはあまりなかった。メルブイルのいうグレゴが帆船における荒天着であったと見なしてよい。グレゴそのものではなく、後頭頂部の尖ったフードが特徴のグレゴに似ていたところからそう呼んだのであろう。帆船の荒天着もまたそのフードが特徴になっていたので、帆船の乗船服であることを強調するため、フードをデザイン化して出来たのがセーラー・カラーであったといえるのではないだろうか。試みに一般的なセーラー服の後ろにあるセーラー・カラーの角襟下縁を真ん中で二つ折りにして両端を揃えればフードのような形になる。仮に、二つ折りにした下縁の両端と折り目の間をそのまま縫い合わせてしまうとすれば、その大きさは別として、その形はフードそのものになる。セーラー・カラーは、すなわち、フードの変形である。

ところで旧日本海軍における水兵の場合、正規の軍服はセーラー・カラーのある水兵服であったが、それとは別に、軍艦や海兵団の中で水兵が着用する普段着のような作業用の事業服があった。水兵服からセーラー・カラーを取って短い幅の小さな襟に替え、ネックカチーフに代わるネクタイやリボンもなく、襟元を紐で結ぶだけの至極シンプルなデザインの作業服である。事業服はその用途が一八五七年から英国水兵に支給された白いズックのジャンパーと同じでありジャンパーとも呼ばれていた。事業服という呼び名は海軍とともに消えたが、服そのものは戦後も継続して商船大学や練習船その他船員養成機関における学生・生徒用の作業服として使われた。いわばファッショニ化したセーラー服を本来の労働服に還元したデザインである。

本庄村史刊行と太田垣さんを偲んで

史料館副館長 大 国 正 美



太田垣正雄さん

念願の『本庄村史』歴史編をようやく刊行することができた。昨年の夏にと思っていたが、予定の原稿がそろわず、結局年度末になってしまった。本場に長い間お待たせして申し訳なかったと思う。

この半年の遅れは致命的だった。一緒に刊行を喜んでいただけたはずの太田垣正雄さんが、昨年の夏に九十八歳で他界してしまったからだ。『本庄村史』は多くの方のご支援によって生み出されたが、太田垣さんなくして出版はありえなかった。ここにあらためて太田垣さんの遺徳を偲び、生前聞き取ったことを記録しておこうと思う。

戦中・戦後の本庄村に奉職して

太田垣さんは明治四十二年（一九〇九）六月二十一日、但馬・養父郡宿南村三谷（現、養父市八鹿町三谷六〇九番地）で、太田垣宗次さん・ふじさんの次男として生まれ、地元の農業学校（後の県立八鹿高校）を卒業。サラリーマンなどを経て、本庄村に勤めたが、病気のため昭和十三年（一九三八）にいったん故郷に帰った。昭和十六年六月、松井善太郎村長に事務能力を買われて再び本庄村に戻り、主事・庶務課長兼水道課長に。折しも川西航空機甲南製作所の誘致が進められていたが、第二次世界大戦中で物資に事欠き、工業用水の水道管確保に苦勞された（道谷卓『うはらの歴史発見』）。空

襲は日増しに熾烈となり、学童疎開に追われた。役場機能も、庶務・防空・会計は村役場、戸籍・兵事関係は深江本町駐在所、税務は西青木公会堂、衛生・厚生は小学校に分散して執務した。

このころの本庄村は財政的には恵まれなかったが、施策は配慮が行き届いていた。昭和十九年になると、女性も軍需工場の労働力として徴用されたため、昭和二十年に疎開中の別荘を借りて戦時保育所を設置した。戦後復興では政府の復興計画に先駆けて、京都大学の学生に委嘱して区画整理のための実測に着手した。

戦後の村政で太田垣さんが折に触れて語られたのは村営葬儀所と村営公衆浴場だった。葬儀所は空襲で死亡した遺体を焼くことに困った体験が原点になっている。業者自体が焼け出されて疎開し、葬業者は皆無になった。そこで村が中型バスを購入し霊柩車に改装しようとしたが、陸運局が認めない。再三陳情と交渉の結果、村民に限るという条件で昭和二十三年八月によく許可が下りた。バス中央に棺を置き、両側に参会者のいす十二人分ほどを設けた。村民に好評で昭和二十五年の合併後も東灘区役所本庄出張所の事業として継続、昭和三十一年に出張所廃止で終了した。

村営公衆浴場も同様で、戦前は七カ所あった浴場が空襲により焼失して一カ所になり、村民は大変不便を味わっていた。このため村が深江南町二丁目と青木六丁目三番の二カ所で、焼け残った半壊状態の浴場を借り受け、川西航空機甲南製作所の廃材を使って修理し営業した。入浴料は大人十銭、子供五銭、洗髪料は十五銭だった。燃料は当初戦災住宅の廃材を利用していたが、次第に入手が困難になり、民間銭湯も復興してきたため、三年余りで中止した。

戦災復興のもっとも重要な時期の昭和二十一年十二月、戦時中の指導者ということで、岩谷省三村長は公職追放となった。同じ月に助役に選任された太田垣さんは村長代理として、これらの事業を推

進された。財政難の村で、起債のうまさは右に出るものがないと言われた。村の借金のため各方面に掛け合った苦労話もよくお聞きした。「税金滞納者がいるうちは金を貸せない」と無理な注文をされたこともあったという。

戦後の合併を経て

財政の行き詰まりに加えて、アメリカが日本を中国やロシアの共産主義勢力からの防波堤にするために、経済的自立を求めてくると、地方財政も締め付けられ、合併以外の選択肢はなくなった。紆余曲折を経て神戸市に合併、太田垣さんは東灘区本庄出張所長に採用された。昭和三十年に出張所廃止に伴い、同三十一年神戸市勤労会館事務長に異動、同三十九年に館長となり同四十年に満五十五歳で退職した。勤労会館では勤労者対象の結婚式や料理教室を始めて好評を博した。退職と同時に、神戸市中央卸売市場東部市場の神戸東冷蔵常務取締役になり、さらに昭和四十六年六甲有馬ロープウエーの総務部長に転進。ところが同社は経営難のため神戸市の公社に売却の憂き目に遭う。太田垣さんは精算事務を任せられ、ここでも苦労された。昭和四十九年には大洋化工株式会社の常務取締役となり、昭和五十四年満七十歳で退職、この年財産区管理会会長になった。

本庄村史に情熱を燃やして

財産区管理会会長になって村史編纂を立ち上げた経緯については『本庄村史』地理編・民俗編、同歴史編の編集後記に詳しいので割愛するが、太田垣さん自身が編集作業に没頭した。戦前本庄村村史編纂嘱託だった松田直一さんが筆写した史料を、ご子息の松田博允氏宅から見つけ出して、当時の文字は読めないからと自ら筆写に加わり、テーマ別の手書きの史料集を作り上げた。深江の医師・深山

健二氏文書、酒造家だった永田健氏文書、青木の中田房次郎氏文書、森の大仁勲氏文書、深江の永井正治氏文書、魚崎八幡神社文書など、史料調査には大抵同行され、一緒に目録取りに加わった。『芦屋市史』に「田中野村文書」と掲載され所有者の分からなかった古文書を芝切義寛氏文書と割り出し、調査の橋渡しをしてくれたのも太田垣さんだった。古文書の習熟も急激に進み、古文書を解読しタイプ印刷の史料集も次々と刊行したが、これは太田垣さんと、芦屋市水道局OBで村史編纂の手伝いに来てもらった渡部壽さんの仕事である。

とにかくエネルギーが豊富だった。それでいて、史料の取り扱いなどについて、若輩者の私が忠告すれば、生徒のように素直に聞いてもらった。微笑ましい、本当に愛すべき人だった。

平成二年（一九九〇）に脑梗塞で財産区管理会会長の職を深山健二氏に譲られたが、本庄村史編纂への意欲は失せなかった。リハビリで回復され、病院通いの合間に村長の子孫探しに没頭され、「ここまでわかったが、この先が分からない」「〇〇さんに調査を頼んでいる」とよく電話をいただいた。ことあるごとにご自宅に立ち寄るように言われ、うかがうと、私の処遇を気に掛けてくださり、小料理店でごちそうしていただいたこともあった。

村史の内容については「専門家に任せます」とほとんど口を出さなかったが、歴代村長の事績や本庄村に戦前二人も朝鮮人の村会議員がいたこと、今はほとんど面影がなくなっていた洋館の建ち並んだ深江文化村があったことは、「なんとか記録して欲しい」と切望された。村長の事績調査は私が引き継ぎ、朝鮮人議員や深江文化村については筆者を探し、村史に何とか盛り込んだ。

朝鮮人の村会議員については、忘れられないエピソードがある。岩谷村長が公職追放になった時に、岩谷村長の自宅で当時の村会議

員らが集って写した記念写真があり『本庄村史』に掲載した。戦後間もないころの村の要人を写した貴重な写真である。歴史的な写真は、撮影日時、場所、写っている人物を特定できてこそ意味が出てくる。そんなわけでいろいろな方に写真を見てもらって、「この人は誰？」と質問を重ねた。人の記憶はあいまいだ。人によって名前が違う。それでも何人も聞き取りを重ねるとおおむね特定できる。ところが誰も答えられない人がいた。「村会議員か村の幹部なのに、誰も知らないのか」。『本庄村史』では「人物不明」のキャプションで掲載を決めた直後。深江財産区管理会の志井保治会長が預かっていた太田垣さんの遺品の中から、この写真と人物を特定したメモが出てきた。生前、人物の特定をお願いしていた返事だった。そのメモには、紛れもなく朝鮮人議員だった車甲得さんの名前があった。「朝鮮人議員で、短期間しか村に住んでいなかったから、記憶に残らなかった」。謎は氷解した。太田垣さんは、亡くなった後まで、村史の真実を求める作業に協力いただいたことになる。

また、村史が発行される前に集まった資料を展示する史料館を作ったのは英断で、太田垣さんなしでは出来なかつただろう。地域史の編纂は、最終目的ではなく地域文化の継承と地域遺産活用的手段にすぎないことを早くから認識されていた。晩年「村史刊行の次は史料館の展示改善をしたい。漁業の展示を充実したい」と熱心に語られていたのが、つい昨日のように耳に残っている。

多くのご恩を受けながら、村史刊行が遅れ暮前にしか報告できないことを深くお詫びしつつ、ご冥福を祈りたい。 合掌

『本庄村史』歴史編は、B5判、八六二ページ。五〇〇〇円（税込。郵送料別途）原始時代から神戸市合併まで。『本庄村史』地理編・民俗編は三〇〇〇円（同）、残部僅少。ジュンク堂三宮店と海天堂書店で販売中。問い合わせは史料館（〇七八・四五三・四九八〇）。

トライやる・ウィークと史料館

—— 本庄中学校の生徒を受け入れて ——

史料館研究員 水口千里

史料館では、本年度も五月三十一日、六月一日の二日間、本庄中学校の二年生に、博物館施設の仕事を体験してもらった。

一日目の午前中は、関心のある資料を用いて資料整理の体験をおこなった。それぞれ、ままごと道具のカップ類と古銭を選択し、撮影、画像処理、写真のプリントアウト、台帳カードの作成をおこなった。古銭については、貨幣史料館のホームページや文献を閲覧し、文様についての簡単な資料を作成した。

二日目は、季節展示コーナーの展示替えの体験である。展示中の五月人形を収蔵庫に収納し、次の季節展示「夏の風物詩」に使用する資料を収蔵庫から出し、テーマに即したレイアウトを検討し、実際に展示作業をおこなった。また、前日に続いている資料整理体験では、考古遺物の土器の接合をおこなった。

後日届いた二人からの手紙によると、展示作業と土器の接合が興味深かったそうである。毎年のものであるが、史料館での二日間は、二人にとってよい経験になったことを願うばかりである。



▲作業風景

展示品との対話（二七）

大小暦の札

史料館研究員 水口 千里

「表と裏に、『大』と『小』という文字が書いてあります。今は、こちらを向けて掛けてあります。さて、この丸い木の札は何でしょう？」というのが、毎年一月から三月にかけて見学にきてくれる小学校三年生への定番クイズである。はじめは「トイレにかけてある」「大人がいるか、子どもがいるか」など可愛らしい回答が続くが、いくつかヒントを出すと「わかった、カレンダー！」と正解が飛び出す。そして、どんなカレンダーなのか話すうちに「知ってる！」と大勢の声が挙がるのが「西向く土」の言葉である。

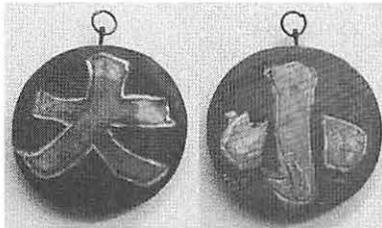
言うまでもなく「西向く土」とは、ひと月の日数が二八日（閏年は二九日）の二月、三〇日の四月、六月、九月、十一月を覚える符丁である。また地域や年代によっては、手の指の付け根の骨を大の月と見立てる数え方で覚えた人もあると言う。英国の伝承童謡マザーグースにも小の月を取り上げた詩があり、短いながらきれいに韻がふまれていて覚えやすい。洋の東西にかかわらず、ひと月の日数が異なることに関心が持たれているのが興味深い。

現在使われている新暦（太陽暦）では「西向く土」で大小月を簡単に覚えることができる。しかし、月の満ち欠けをもとに作られた旧暦（太陰太陽暦）では「大」の月は三〇日、「小」の月は二九日であり、日数の調整のために閏月が発生するなど複雑だった。一年やひと月の日数が毎年一定ではなく、翌年の暦を見なければ「大」「小」の配列がわからなかった。それを簡単に示すために使われた

のがこの大小暦の札で、商家の店先などに吊るされていた。史料館所蔵の札は、直径一二・三センチ、厚さ一・七センチ、「大」「小」の文字の周囲が溝で縁取られ、緑色に着色されている。

大小暦はわかりやすいためか、十二支や二十四節気などと組み合わせ、多様な形態や趣向で描かれている。たとえば「判じ絵」では、一見してわからないよう「大」や「小」の月が描かれていて、そこから年号を推察する。また、私が以前見た暦碗には、「天保一五年」の大小月と朔日の干支が碗の外側に記してあった。

大小暦にかぎらず、暦は常に生活の必需品であり、古代からさまざまな暦が作られてきた。明治五（一八七二）年、新暦（太陽暦）が標準暦として採用されると、私たちの生活は新暦のもとで統括されることになった。しかし、なぜか旧暦は消えてなくなならない。雛祭りや七夕などを旧暦に近い日程でおこなう地方も多い。年末には旧暦のカレンダーが店頭に並び、ニュースでも「立春」「啓蟄」「立秋」などが枕詞のように用いられ、実際の気候との差を強調する。また、数年前の新聞に、あるアパレルメーカーは旧暦を意識して商品の出荷の時期を決定するという記事があった。



▲大小暦の札（表と裏）

旧暦が、今でも好まれて使われる理由は、実際に体感している気候を、違和感なく受け入れられることに加えて、二十四節気の気候を示唆する言葉が、日本の四季折々の移ろいを如実に言い表していることが大きいだろう。それは、もともと自然の季節の変化の中に暦（自然暦）を感じて暮らしてきた私たちの祖先が、今に伝える日本人らしさのひとつなのかもしれない。

史料館日誌抄

史料館研究員 道谷 卓

平成一九年四月以降

△平成一九年▽

- 5月27日 甲南大学文学部(見学者 四一名)
 5月31日/ トライやるウィーク・本庄中学校二年生二名を受入れ、二日間史料館の業務を体験してもらう。
 6月1日 東灘区役所新規採用職員研修(見学者 一四名)
 7月4日 東灘区転入区民バスツアー(見学者 三六名)
 9月17日 夢野小学校 三年生(見学者 二九名)
 11月15日

△平成二〇年▽

- 1月11日 本庄小学校 三年生(見学者 一〇六名)
 1月18日 六甲アイランド小学校 三年生(見学者 一二五名)
 1月21日 本山第三小学校 三年生(見学者 一三〇名)
 1月22日 西郷小学校 三年生(見学者 七七名)
 1月23日 甲南小学校 三年生(見学者 五八名)
 1月24日 六甲小学校 三年生(見学者 五二名)
 1月25日 中央小学校 三年生(見学者 九一名)
 1月28日 本山第二小学校 三年生(見学者 二四九名)
 1月29日 福住小学校 三年生(見学者 一〇三名)
 1月31日 福池小学校 三年生(見学者 一四一名)
 2月5日 向洋小学校 三年生(見学者 一〇一名)
 2月6日 西灘小学校 三年生(見学者 七二名)
 2月7日 東灘小学校 三年生(見学者 一八四名)
 2月8日 灘小学校 三年生(見学者 六二名)
 2月12日 御影小学校 三年生(見学者 一〇一名)

資料寄贈者ご芳名(敬称略・二〇〇七年四月)以降

- 2月13日 なぎさ小学校 三年生(見学者 八五名)
 2月14日 本山南小学校 三年生(見学者 一〇九名)
 2月15日 なぎさ小学校 三年生(見学者 八〇名)
 2月21日 兵庫大開小学校 三年生(見学者 一三一名)
 2月27日 宮本小学校 三年生(見学者 三一名)
 2月29日 本山第一小学校 三年生(見学者 一四九名)

西垣良雄・藤川耕策・海野拓司・林茂夫・大機勝・石井和子・高
 浜忠義 (藤川祐作記)

編集後記

『本庄村史』歴史編が、刊行の運びとなりました。編集責任者として携わってきた大国副館長をはじめ関係者一同、長年の課題を完遂できた喜びと、地元の皆様に完成をお待たせしてしまったことへの詫言の気持ちが交錯しています。史料館では、これに安堵することなく、これからも将来を見すえて情報発信できるよう、あらたな取り組みを考えています。(水口)

『生活文化史』第36号 08・3・31

編集/水口千里

発行/神戸深江生活文化史料館

〒658-0021 神戸市東灘区深江本町3-5-7

☎078-45314980 (FAX兼用)

http://homepage2.nifty.com/fukae-museum/